第 193 号　令和 5 年 6 月 23 日発行

中田かわら版　7 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会　　協力：中田連合自治会　泉区役所
制作：中田かわら版制作編集委員会　　横浜市踊場地域ケアプラザ

子どもの“あるがままに”を大切に！

郡司　和明さん　　続「発明クラブがやってくる」40 周年

郡司和明さん（右）と筆者

前号第 192 号の続編の形で郡司和明指導員に突撃インタビューを行った。郡司さんは発明クラブ創立 3 年目の昭和 60 年から指導員を務めてこられ、その間に延べ 1600 人ほどの卒業生を送り出してきた。指導員を志したきっかけは、公益社団法人発明協会から 75 周年事業で、子ども教育の一環に少年少女発明クラブの設置を全国に呼びかけられたことによる。そして小山栄治さんや奥津喬雄さんらが発明協会所属員だった縁で昭和 57 年中田にこのクラブが誕生した。

神奈川県第 1 号のクラブ、44 名でスタート。現在全国 234 クラブという。その 3 年後、回覧板でクラブ員指導員募集を知り発明コンクール入賞経験を持つほど考えることが好きだったので応募し以来 39 年目の今も続いている。

■ 逗子や平塚など中田以外の子ども達も　■

スタートから 30 年ほどは木工作業ができたが、その後環境が変り現在は前号で紹介したような「ネジや釘を使わない接続での工作、電気・電池で動く物作り」いろいろな要素を持つカリキュラムを作ってやっている。クリスマス会も組まれている。コロナ禍もあって現在はやっていないが以前には 1 泊研修 JAXA や各地科学館見学等の野外研修もおこなっていたとのこと。それにしてもカリキュラムがすごい。小学生がこれだけのことを学べる場所はそうそう無いと思うので、**読者の皆様にも下の QR コードを読み取ってそのすごさをぜひ感じていただきたい**。感心すること請け合いです。令和 5 年度の講座は 8 月の休みを除き 5 月から翌 3 月までの隔週日曜日、全 19 回に及ぶ大事業となっている。クラブ員は逗子や平塚など中田以外の子ども達も多勢参加していて、クラブの歴史の重みも感じる。

■ 先入観では発明は生まれない　■

子ども達との学びの中で自分の人生が広がってきたように思う、点が面になっていくように…。また前号での尾関指導員については「中田のほかに『やべいけ発明クラブ』を指導さらに『発明クラブがやってくる』のような出前授業もやり続ける。その行動力には尊敬と敬服をしている」と話された。そして指導員が不足気味で、子どもと一緒にやってくれる指導員をほしい、**QR コードから応募してくれたらありがたい**。2022 年、発明協会から優秀指導員表彰を受けられた郡司さんは「大人たちの先入観で指導していたら発明は生まれない」「クラブ員がやりたいことをやらせてとことん見守る」「私はそれを“あるがままに”といい、座右の銘として大事にしています」と。そこには温和な中に一筋通った人柄そのものの表情があった。　（河内満明）

～一人ひとりが CO２を減らす努力をし、美しい地球を子どもたちに残そう！～

記事にある情報をより詳しく知りたい方は、踊場地域ケアプラザ　嶋（しま）まで問い合わせください。
TEL　801-2114　FAX　801-2923

■「中田むかしの話」<4>

中田のお殿様「石巻康敬のこと」（上）

元泉区歴史の会会長　　宮本　忠直著

長後街道の中田寺を過ぎ、御霊神社に向かう道を行き最初の T 字路を右に曲がって 150 米ほど行く。更に左の三階建ての集合住宅先を左折した所に、江戸初期の中田の殿様であった石巻康敬<いしまきやすたか>の墓がある。横浜市の登録文化財に指定され、入り口にその由来を記した説明板が立っている。「故従五位下下野守石巻君の墓」と刻まれた墓石が中央に立ち、周りは低い玉垣に囲われている。宝暦 12 年（1762）9 月、七代後裔の石巻康福<やすふく>が、康敬 150 回忌の法要に新しく建立したものである。

石巻康敬家は戦国期に小田原北条氏の評定衆や相模西部の郡代を務めた家筋で、有名な後北条の虎印を押した「裁許印判状」に、石巻家の主の何人かが署名をした花押を記した古文書が今も残っていることから、小田原北条氏の重臣だったことが分かる。

天正 18 年(1590)7 月、小田原城落城によって秀吉の小田原攻めは終わるが、この年の春、北条氏直は秀吉の執拗な上洛に応えるため石巻康敬を氏直の使いとして京都に向かわせ秀吉に会わせた。しかし秀吉は氏直が上洛しないことを責めて康敬を上洛緩怠の罪で監禁。天正 18 年 3 月、小田原を攻めるために京都を出発した秀吉は石巻康敬を同行させている。小田原攻略に城中の様子を知る者が居れば作戦上有利であると考えたのか。だが康敬がどれほどの城中の情報を提供したかは知る由もない。いずれにしても秀吉はこの小田原攻めに、一夜城まで作って小田原北条に迫ったのだから尋常の攻略戦ではなかったことが分かる。

問題は小田原落城に際し、秀吉は何故石巻康敬を北条勢に渡さず、狩野川沿いにあった沼津旧城の「三枚橋城」で徳川家康に預けたかである。考えられるのは石巻家の先祖の地は愛知県豊橋市石巻町（三河国八名郡石巻）で、徳川家と同じ三河国の出身である。家康の時代の康敬家とは家格の違いがあったと思われるが、それ以前にも数代にわたっての付き合いは当然あったに違いない。

徳川家康も娘の督姫を小田原北条四代目当主氏政の嫡男氏直に嫁している。その氏直が小田原最後の五代目当主として秀吉に滅ぼされ、戦国の悲劇の主人公となるのである。

そんな時代の流れのなか逞しく生きた家康や康敬の、誼<よしみ〉を知っていたから、秀吉は石巻康敬を徳川家康にあずけたのだろう。こうして石巻康敬は家康の計らいで、当時一寒村だった中田村で蟄居生活を送るのである。

編著　宮田貞夫

編集後記

変なウイルスによる感染症が 4 年を経て第 5 類になった。とは言え脅威が去ったわけでも無いらしく、あちこちの町内でも各種行事をやるやらないでかまびすしい。曰く勢いだけでやって良いのか、曰く勢いが世の発展につながってきた。云々。慎重に勢い良くとは行かないものだろうか。

河内満明

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会
委員長　宮田貞夫　　編集長　松本 正
編集委員；山木重樹、小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、佐々木弘美、鈴木賀津彦、嶋　宏之